

# 日研修生・生

各国の農村開発や環境保全活動にの受け入れが始まったのは1963年。の農家や企業に技術指導を委託するターで行うオイスカ独自の青年が日本での研修を年を超える研修事業の藤井啓介が



研修に含みます

センターの研修には、日本語や日本文化を学ぶ短期研修の受け入れもあります！



研修生OBの中には、帰国後に母国で政府の大臣に就いた人も複数名います

## 1

受け入れ人数

延べ**5,607人!**

(研修生数：3,505人／技能実習生数：2,102人)

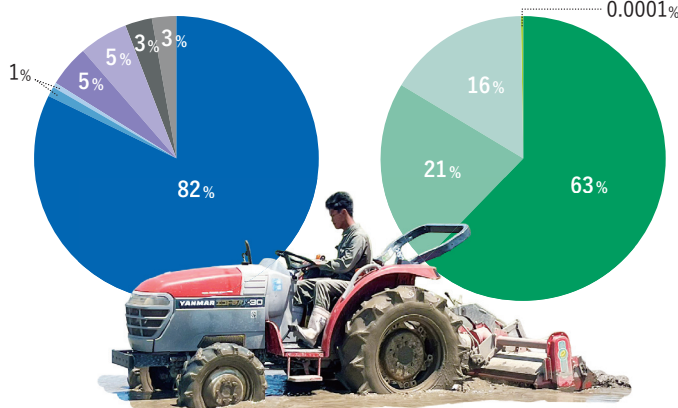
約63年間で、5,600人を超える海外の青年が日本での研修を修了しました。性別の内訳は男性8割、女性2割。研修内容は円グラフの通り、センターで行う研修では、農業分野が8割を占めます。ほかにも女性向けに家政や生活改善コースなども受け入れてきました。

一方で技能実習と委託研修も農業（6割）や製造業（2割）が主流ですが、近年の技能実習生増加に伴い、自動車整備や介護といったサービス業の受け入れも拡大。時代や社会のニーズに合わせ、多様な分野での国際人材育成に取り組んでいます。

センター研修のコース別人数の割合



技能実習・委託研修の業種別人数の割合



## 3

平均年齢

**25.8歳!**

全研修生、技能実習生のうち、生年月日の記録がある5,453名の入国時の平均年齢は25.8歳で、改めてオイスカの研修が青年を対象とした研修であることがわかります。そのうち、最年少は1968年のインドからの15歳、最年長は1982年と89年の台湾（短期研修）からの63歳でした。さらに研修生だけの平均は27歳、技能実習生は24歳。男女別では、男性26歳、女性25歳でした。



受け入れ国・地域のうち日本から最も距離が遠い国は、南米のウルグアイ！

## 2

受け入れ国・地域の数

**58!**

研修生の受け入れは1963年、フィリピン（機械）とガーナ（繊維技術）からの受け入れに始まりました。その後63年間で58の国と地域から研修生を受け入れましたが、約9割はアジア圏。そのうち、研修生数と技能実習・委託研修生数の割合は3：2でセンターでの受け入れが多く、男女比は4：1でした。続いて、南太平洋諸国を含むオセアニア圏が多く、アジア圏と合わせると受け入れ人数の割合が98%と、ほとんどを占めます。

地域別受け入れ人数

	アフリカ圏	アメリカ圏	アジア圏	ヨーロッパ圏	オセアニア圏
男性	28	21	4,129	2	324
女性	12	22	998	1	70

(人)



数字で見る!

# オイスカ訪 技能実習

オイスカは創立以来、人材育成を基盤に、これまで取り組んできました。訪日研修生現在の技能実習制度にも通じる、外部「委託研修」に始まり、70年代からはセン農業研修がスタート。現在、多くの農村修了し、母国で活躍しています。この60数値データをもとに、人材育成部長のオイスカの訪日研修のあゆみを振り返り

※データ、グラフ、表は全て1963～2026年4月のデータを参照  
※技能実習生数には委託研修生を含みます  
※技能実習制度移行前の農業分野の委託研修生は、センター

## 5

受け入れ人数が一番多い年

# 1991年!

1991年に受け入れた人数は225人。そのうち140人が委託研修でした。当時は、センターでのJICA受託の農業研修に加え、全国の受け入れ企業で、農業や製造、サービスなど幅広い分野で委託による技術研修が行われ、日本企業と各国送り出し機関との交流も活発だったことがうかがえます。なお、研修生のみでは1988年の113人が最多で、バブル崩壊前の好景気も背景の一つと考えられます。また、技能実習生は、1991年に並び2022年も140人で最多となっており、近年の技能実習生受け入れの増加傾向を反映しています。

受け入れ初期には船で海を渡り、数カ月かけて来日した研修生も!



1963年以降、受け入れ人数が一番少なかった年は、新型コロナウイルス拡大による渡航制限が行われた2021年(1名)でした



委託研修では、日本の最先端技術だけでなく、職場の改善・効率化のための5S(整理・整頓・清掃・清潔・しつけ)やチームワークなども学んだ(写真は1980年頃)



## 4

2回以上来日した人数

# 342人!

最多は4回(5名)で、いずれもフィリピン出身者でした。1回目はセンターの農業研修に参加し、2回目以降は農業指導や、外部の委託研修生として来日するといったケースです。最近では、センターの研修に参加した後、技能実習生として来日する例も増加傾向にあります。

## 6

研修生・技能実習生数が一番多い国

# フィリピン 1,545人!

研修生、技能実習生・委託研修生ともに、最多はフィリピンでした。同国は、日本からの技術員派遣数と現地研修センター数も最多で、フィリピン各地のセンターで育成した人材を日本へ派遣する体制が整っていたことから、長年にわたり多くの訪日研修生を派遣できたといえます。次に多いマレーシアは、技能実習生・委託研修生の数がフィリピンとほぼ同規模です。その背景には、1967年にマレーシア政府・地域開発省傘下で人材育成を担うマラ公団とオイスカとの連携が始まり、同公団を通じて工業分野を中心に多くのマレーシア青年を受け入れてきた歴史があります。

レタスの出荷作業、がんばります!

基礎研修を終えて、修了証を手に入!

